

氏名	: 胡 啓慧
専攻分野の名称	: 博士（教育学）
学位記番号	: 博甲第 338 号
学位授与年月日	: 令和 2 年 3 月 1 7 日
学位授与の要件	: 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名	: 学習者中心のディープアクティブラーニングの視点に基づく輪読式学習の改善に関する実証的研究
論文審査委員	: (主査) 教授 有元 典文 (副査) 教授 野中 陽一 教授 寺井 正憲 教授 高木 まさき 准教授 高橋 純 教授 但馬 文昭

学位論文要旨

高等教育において、高次能力の育成を目指す深い学習、学習者中心のディープアクティブラーニングの実現は重要な課題となっている。学習者中心のディープアクティブラーニングを実現するために、先行研究から、その実現要素を整理し、実現モデルを提案した。そのモデルにおいて、学習者中心のディープアクティブラーニングは、①授業外の内化(知識の習得・理解)、②授業内の外化(知識の活用・再構築)、①と②を繰り返し、さらに③授業内外における内化と外化の学習サイクルを促すことが目標となる。この3つの目標を実現するため、「内化・外化」及び「授業外・授業内」という2つの視点で学習活動の組み合わせを検討する必要があると考えた。

そこで、学習者中心のディープアクティブラーニングの検討を行うために、事前の文献講読やレジュメの作成などの授業外学習を前提とし、グループで文献や書籍を分担して読み、発表や討論などによって、専門的な学問分野の理解を深める輪読式学習に着目した。輪読式学習は「内化」と「外化」の学習活動に加え、授業外学習が内包されており、高等教育において広く行われている学習形態ではあるが、定式化されているわけではない。そのため、深い学習が目指す高次の認知力だけでなく、学習の主体性が生まれるように改善することが可能である。一方、輪読式学習の課題について、事前学習及び対面討論が不十分であることが指摘されている。また、これまでの実践研究は様々な工夫によって、その改善を試みているが、学習者中心のディープアクティブラーニング(深い学習)という視点では検討されていない。

以上から、本論文では学習者中心のディープアクティブラーニングを促すため、「内化・外化」及び「授業外・授業内」の視点から、輪読式学習における学習活動の構成を改善することを目的とした。具体的には、ICT活用及び可視化支援を取り入れた反転輪読を設計・実践し、その効果を明らかにすること、そして、輪読式学習の実践から得た知見に基づき、①授業外の内化、②授業内の外化、③授業内外における内化と外化の学習サイクルの関係を明らかにし、それらを促す方法を検討し、学習者中心のディープアクティブラーニングのモデルを精緻化することである。

この目的に沿って4つの実践研究を行った。実践研究1では、輪読式学習と学習者中心のディープアクティブラーニングの関係を検討し、輪読式学習改善の方向性を明らかにした。一般的な

輪読式学習（以下対面輪読）において、「①授業外の内化」である事前学習及び「②授業内の外化」である対面討論が不十分であるという課題に対し、①に発表聴講（事前に収録した発表ビデオの視聴）という内化の活動、②に BBS での討論という外化の活動を取り入れ、輪読式学習の学習活動の改善を図った。具体的には発表聴講と討論（BBS での討論）をオンラインで行う「オンライン学習」と、発表聴講のみをオンラインで行う「反転学習」の二つの学習形態を実践した。その結果、「オンライン学習」と「反転学習」は深い学習に寄与し、2つの学習形態における「①授業外の内化」及び「②授業内の外化」の方法（学習活動）は深い学習に影響することが明らかになった。

実践研究2では、学習活動の構成を改善するため、「①授業外の内化」における方法を検討し、音声発表を取り入れた学習者中心の反転輪読Ⅰを考案して実践した。アンケート調査によって、授業外の音声発表が「①授業外の内化」を促すことに寄与し、更に「②授業内の外化」についても寄与する可能性が得られた。実践研究3では、音声発表の聴講が「①授業外の内化」に及ぼす影響を明らかにするため、多人数講義でその効果を検証した。客観テストで図った結果、音声発表による予習は「①授業外の内化」に寄与することが明らかになった。

実践研究4では、学習活動の構成を更に改善するため、音声発表だけでなく、「②授業内の外化」の方法である可視化支援も取り入れた反転輪読Ⅱを設計・実践し、その効果を検証した。アンケート調査、討論の質的分析によって、対面輪読、反転輪読Ⅰと反転輪読Ⅱの深さの違い、また、「①授業外の内化」における音声発表と「②授業内の外化」における可視化支援が深い学習に及ぼす影響を明らかにした。

4つの実践研究の結果から、音声発表及び可視化支援により、反転輪読Ⅱは対面輪読、反転輪読Ⅰと比べ、学習活動の構成が改善され、より深い学習を促す学習者中心のディープアクティブラーニングである技法になったと考えられる。

音声発表は「①授業外の内化」における改善である。音声発表を取り入れることにより、担当部分では本の読み直し、非担当部分では、音声発表の聴講、レジュメを読むことなどによって、「①授業外の内化における学習サイクル」が生じたと考えられる。学習者は知識の習得だけに留まらず、理解を再確認したり、振り返ったりするなどの学習を主体的に行うようになった。

可視化支援は「②授業内の外化」における改善であり、その活用は自分の考えを書いて話すといった「②授業内の外化における学習サイクル」を促した。そして、討論に平等参加することを実現し、学生の主体性を引き出し、「③授業内外における内化と外化の学習サイクル」を促すことができるようになったと考えられた。

輪読式学習の改善の実践から、学習者中心のディープアクティブラーニングのモデルについて新たな知見が示唆された。まず、授業外では学生が独学の状態であり、知識理解を深める内化の学習は中心で、学習活動を組み合わせることで「①授業外の内化」を促す。それについて、ICTを活用して自省自学のような主体的学習を促すことは重要である。次に、授業内ではグループ学習の状態であり、知識を活用して再構築する外化の活動は中心である。しかし、授業内の外化の学習活動は知識の再構築を目指す「②授業内の外化」だけではなく、学習者の主体性を引き出し、「③授業内外の内化と外化における学習サイクル」を促す役割も果たす必要がある。

そして、「①授業外の内化」、「②授業内の外化」、「③授業内外における内化と外化の学習

サイクル」を促すことは3つの学習サイクルを促すことと考えられる。「①授業外における学習サイクル」はICT活用などで授業外の内化及び外化の活動によって自省自学を促すこと、「②授業中における学習サイクル」は授業中で思考を可視化すること、そして「③授業内外における学習サイクル」は授業中の外化活動に平等参加することが重要となる。

以上の研究成果により、学習者中心のディープアクティブラーニングにおける「内化・外化」及び「授業外・授業内」の視点から、輪読式学習における学習活動の構成を見直して改善し、その効果を明らかにした。そして、輪読式学習の実践から得た知見に基づき、①授業外の内化、②授業内の外化、③授業内外における内化と外化の学習サイクルの関係及びそれらを促す方法を明らかにし、学習者中心のディープアクティブラーニングのモデルを精緻化した。